二〇二二年一二月一六日

トンネルへ貨車を呑み込み山眠る　素　秀
弁当といつしよに包む風邪薬　ひのと
鋤きたての土くれ転ぶ冬の畑　千　鶴
存問の文添へ蜜柑届きけり　こすもす

二〇二二年一二月一五日

つま先で喧嘩してをる炬燵の子　ひのと
日向ぼこ馬鹿な青春語り草　うつぎ
湯豆腐や手酌がよろし湯治宿　澄　子
頬染めて子らの聖歌の声透る　素　秀
鯛焼の匂ひに負けて後戻り　豊　実

二〇二二年一二月一四日

冬落暉閉じし瞼に透けにけり　む　べ
北へ向く帰郷の舳先しぐれけり　ひのと
良きことも少しは有りて日記果つ　うつぎ
出で立ちは冬山装備畑に立つ　千　鶴
玻璃窓に納まりきらぬ大き虹　せつ子

二〇二二年一二月一三日

分校の長き廊下や日脚伸ぶ　みきお
寒き夜のパズルに失せし一欠片　ひのと
忘れたり間違えたりや年用意　たか子
不揃いの大根並ぶ「ご自由に」　豊　実
絵硝子の聖母にやはき冬日かな　もとこ
綾取りに継ぎ足す母の残り糸　ひのと
華燭され大樹聖樹となりけり　なつき
失せ物を探しながらの煤払　なつき
たつ波を鎮めるごとく紙を漉く　宏　虎

二〇二二年一二月一二日

あれこれと老いの手抜きや年用意　董　雨
生涯をこの地と定め雪囲ひ　ひのと
汝れ偲ぶ追悼句集帰り花　たか子
クッションの窪みに沈み冬籠　素　秀

二〇二二年一二月一一日

遠火事のサイレンに止む口喧嘩　素　秀
雑巾はかつての襁褓煤はらひ　ひのと

二〇二二年一二月一〇日

冬晴の浜辺は児等の運動場　きよえ
茶の花の垣根ぬけゆく御廟かな　なつき
摩天楼ビルを直撃寒落暉　せいじ
白き尻見せ合ひ潜る鴨をかし　もとこ
眠れる手そつと蒲団に仕舞ひけり　ひのと
差し伸べる手の如空へ大冬木　こすもす

毎日句会みのる選・二〇二二年一二月一八日